「財産と神の国―人間にできないことも神にはできる」

ルカ 18:18-30

2020.6.14 南与力町教会朝拝

序：乳飲み子と金持ち

前の箇所でイエス様は乳飲み子たちをご自分のもとに招き、18 章 17 節で次のようにおっしゃっていました。

「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

このようにイエス様は、神の国に入るためには、幼子のように神の国を受け入れる必要があることを教えておられました。

そして今日の箇所の 18 章 24 節 25 節では次のようにおっしゃっています。

「「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」

イエス様は何の財産も持たない幼子たちについては「神の国はこのような者たちのものである」と言われました。しかし、財産のある者、金持ちについては「神の国に入るのは、なんと難しいことか」と嘆かれたのです。それゆえ幼子と金持ちとは神の国に入るということにおいて対照的な存在です。幼子は神の国に入ることができるが、金持ちは神の国に入ることが極めて難しいのです。しかしなぜ金持ちは神の国に入るのがそれ程難しいのでしょうか。

①財産のある者が神の国に入る難しさ

金持ちはお金のことしか考えず、「神の国」や「永遠の命」のことなど考えもしないからでしょうか。必ずしもそうではありません。今日の箇所の始まりである 18 節には次のようにあります。

「ある議員がイエスに、「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねた。」

この「ある議員」が「大変な金持ち」（23 節）だったわけですが、彼は自らイエス様に「永遠の命」について尋ねているのです。それゆえ彼はお金のことにしか興味がなかったのではありません。「永遠の命」にも興味があり、それを受け継ぎたいと思っていたのです。そして何をすればそれを受け継ぐことができるかをイエス様から聞こうとしました。

この金持ちの人はマタイ福音書では「青年」と記されており（マタ 19:22）、それゆえ「金持ちの青年」としばしば呼ばれます。一方ルカは彼が「議員」であったと記しています。彼はユダヤ教の最高法院（サンヘドリン）の議員だったのかもしれません。ただこの「議員」という言葉は、「上に立つ者、指導者、役人」という幅広い意味がありますので、彼がどういう役職に就いていたのか正確なことは分かりません。しかし、彼が高い地位に着いていたことは確かです。彼には地位も名誉も、そして豊かな富もあったのです。周りの人からは何の不足もない、幸せな人と思われていたかもしれません。しかし彼自身はそれで満足はしていなかったのです。果たして自分は「永遠の命」を受け継ぐことができるの

か。自分はこの世では恵まれた状態にあるけれども、自分が死んだ後、果たして「永遠の命」を受け継ぐことができるのか。神の国に入って、そこで永遠に生きることができるのか。そのことについて彼は自信がなかったのです。だからこそ、彼はイエス様に尋ねたのです。「永遠の命を受け継ぐためには、どうすればよいのですか、何をすればよいのですか」と。

それに対してイエス様は次のように答えられました。19 節 20 節
「イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」

イエス様はまずこの議員がイエス様のことを「善い先生」と呼んだことを問題にしておられます。私たちからすれば、イエス様のことを「善い先生」と呼んでも問題ないように思えます。しかし当時、ユダヤ教のラビのことを「善い先生」と呼ぶことはまずなかったようです。イエス様は彼が使った「善い」という言葉に、自分へのおもねり、またはお世辞のようなものを感じ取ったのかもしれません。そして「神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」と言われ、その神の掟をあなたは知っているはずだ、と言われました。自分に「善い先生」とおもねるまでもなく、唯一善いお方である神がおられ、その神の掟をあなたは知っているはずではないか、と言われたのです。そしてその掟の具体的なものとして『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え』という十戒の中の 5 つの掟を挙げられました。そういう掟を守れば永遠の命が得られるということでしょう（ルカ 10:25-28 参照）先ほど読んでいただいた申命記 30 章 16 節にも次のように記されています。
「わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。」
旧約聖書において既に、神様の戒めと掟を守るならば命が得られると約束されていたのです（レビ 18:5 も参照）。そしてイエス様もそのことを承認しておられるのです。

これを聞いた金持ちの議員はどうしたでしょうか。21 節で次のように言っています。
「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」。
この彼の言葉に嘘はなかったと思います。実際、彼は小さい頃から信仰教育を受け、十戒を守って真面目に生きてきたのだと思います。しかしそれでも彼には永遠の命が得られる確信がなかったのです。

イエス様はその彼に次のように言われました。
「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」。
イエス様も彼が言った「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」という言葉を否定されませんでした。しかし、イエス様は彼にそれで十分だ、それで永遠の命が得られる、とは言われませんでした。「そのあなたにもまだ欠けているもの一つある」と言われたのです。その「一つのもの」とは「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてあげること、そして「わたし」、すなわちイエ

ス様に従うこと」でした。
　これを聞いた議員はどうしたのでしょうか。23 節には次のようにあります。
「しかし、その人はこれを聞いて非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。」
　ルカはマタイやマルコのように、彼が「悲しみながら立ち去った」とは記していません。しかし彼が「非常に悲しんだ、深く悲しんだ」ということははっきりと記しています。なぜ悲しんだかというと、彼が「大変な金持ちだったから」です。彼には莫大な財産があり、それをすべて捨てて、イエス様に従うこということが彼にはできなかったのです。それゆえ彼はそうしないと永遠の命を受けられないと言われて、深く悲しんだのです。

　イエス様はそのように悲しむ彼を見て言われました。
「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」
　当時のパレスチナでは「らくだ」が最も大きな動物でした。そして「針の穴」は最も小さな穴と言えるでしょう。最も大きなラクダが最も小さな針の穴を通るというようなことは、普通に考えれば不可能です。しかしイエス様は、金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい、まだ簡単だと言われたのです。それ程に、財産のある者が神の国に入ることはまことに難しい、極めて困難だとおっしゃったわけです。

　この物語、そしてここに記されているイエス様の言葉は私たちを困惑させるものかもしれません。なぜイエス様は金持ちの彼にこんなに厳しいことを言われたのでしょうか。全財産を売り払って、貧しい人に施しなさい、それからわたしに従いなさい、と言われたのでしょうか。私たちがもしそのように言われたらどうでしょうか。その通りにできるでしょうか…。もしそのようにしないと神の国に入れない、永遠の命を受けられないというのであれば、一体だれが救われるのでしょうか。26 節でイエス様の言葉を聞いた人々が「それでは、だれが救われるのだろうか」と言っていますが、それはそのまま私たち自身の問いにもなるでしょう。当時の人々は、財産のある者、お金持ちの人は神様から祝福された人だと考えていました。そのようなお金持ちでさえ、神の国に入ることがそれ程難しいのなら、一体だれが救われるのですか。それが人々の率直な問いだったわけです。

　そもそもなぜイエス様は、持っているすべての物を売り払って、貧しい人に施すように、それからわたしに従いなさい、と言われたのでしょうか。もしイエス様が「わたしに従いなさい」ということだけ言われたならば、金持ちの議員もつまずくことなく、財産をもったままイエス様に従うことができたかもしれません。あるいは持ち物の全部ではなく、一部を売って施すということであれば、金持ちの彼も実行できたかもしれません。しかしイエス様が言われたように「持ち物の全部」を売って施すとなると、これは本当に難しい、ほとんど無理なことに思えるのです。金持ちは深く悲しむことしかできませんでした。

　イエス様は彼に持ち物を全部売って、貧しい人に分けるならば、「天に富を積むことになる」と言われました。これがイエス様の狙い・目的だったわけです。ではなぜ「天に富を積む」必要があるのでし

ょうか。神様の前に功績を積んで、それによって天国に入れてもらうためでしょうか。そうではありません。この「天に富を積む」ということについては、ルカ福音書 12 章 33 節 34 節でも語られていました。お聞きください。
「自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」

イエス様が天に富を積みなさいと言われるのは、富のあるところに、その人の心もあるから、なのです。イエス様はこの議員が大金持ちであることをご存じであったでしょう。そして多くの富を地上に積んでいるがゆえに、彼の心が地上に強く縛られていること、彼が地上の富により頼み、望みを置いていることを見抜いておられたのだと思います。だからこそイエス様は彼に持ち物すべてを売って、貧しい人に施すように、そうして天に富を積み、地上に縛られた心を天に上げるように、地上の富ではなく、天の国に望みを置くよう促されたのです。そのようにしてご自分に従うように、イエス様は言われました。もちろん全財産を売って貧しい人々に施しなさいということはイエス様がすべての人に対して言われたことではありません。しかし原則的には、イエス様に従うために「自分の持ち物をすべて捨てる」ことが必要です。それはルカ福音書 14 章 33 節でイエス様が次のようにおっしゃっていることからもわかります。
「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」
それゆえ、イエス様がこの議員に対して持ち物をすべて捨てて、自分に従うようにと言われたことは、何か彼にだけいじわるを言ったというようなことではないのです。それをしないならば、彼は本当の意味でイエスに従うこと、イエスの弟子になることはできなかったのです。彼の心はそれほどに自分の財産に縛られていたということでもあるでしょう。
しかし、イエス様はなぜそこまで徹底的な仕方でご自分に従うことを求められるのでしょうか。それはやはり神様の掟も基づいたことなのだと思います。イエス様は 20 節で『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え』という掟を彼に示していました。これは十戒の後半、隣人を愛することに関わる教えです。しかし、ここには十戒の前半、すなわち神様を愛することについての教えがありません。それは守らなくてもよいのでしょうか。そんなことはないはずです（ルカ 10:25-28 参照）。神様を愛する教えの要約は申命記 6 章 5 節に記されています。それは「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」というものです。
金持ちの議員に足りなかった一つの事とは、このことだったのです。「心を尽くし」とは、「すべての心をもって」という言葉です。彼の心は地上の富に置かれていました。富を愛していました。それゆえそのままでは「すべての心をもって、心を尽くして」主を愛することができなかったのです。それができるように、イエス様はまずすべての持ち物を売って施し、天に富を積むように言われたのです。そしてイエス様が「わたしに従いなさい」と言われたのは、イエス様こそが従うべき「主」であられるからです（ルカ 5:8）。心を尽くして主を愛し、主に従っていくならば、永遠の命を得、神の国に入ることができるのです（申 30:20 参照）。

しかし、それが金持ちの議員にはそれができず、深く悲しんだのです。「財産のある者」が神の国に入るのはそれほどに難しい、らくだが針の穴を通るよりも難しいのです。それでは一体だれが救われるというのでしょうか。

②神による救いと報い（祝福）

イエス様は27節で次のように答えられます。
「人間にはできないことも、神にはできる」。

人間がらくだを針の穴に通すことができないように、財産のある者が神の国に入ることも、人間にはできないこと、不可能なことです。人間は自分の持ち物、財産に執着し、それを愛し、捨て去ることができないからです。そうして心を尽くして神を愛し、主に従うことができないのです。しかし、人間に不可能なことも、神にはできる、神にとっては可能である、とイエス様は言われました。私たちが救われ、神の国に入ることができるとすれば、それはただ神の恵みによって、神の恵みの奇跡としてのみ起こり得ることなのです。

このようにイエス様が言われると、弟子の代表としてペトロが次のように言いました。
「このとおり、わたしたちは自分の物を捨ててあなたに従って参りました」
漁師だったペトロたちは、イエス様から「今からの後、あなたは人間をとる漁師になる」と言われて召された時、舟を陸に上げ、すべてを捨ててイエスに従いました（ルカ5:10-11）。またレビという徴税人もイエス様から「わたしに従いなさい」と言われた時、何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従ったのです（ルカ5:27-28）。

イエス様はペトロをはじめとした弟子たちに言われました。
「はっきり言っておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

イエスの弟子とは、イエスに従うため、すなわち神の国の働きのために、家や妻や兄弟や両親や子供を捨てた者たちです（ルカ14:26）。これは決して簡単なことではありません。むしろ、自分の財産を捨てるよりも、自分の愛する妻や兄弟や両親や子どもを捨てることの方が難しいとも言えるのではないでしょうか。なぜ弟子たちはそのようなことをすることができたのでしょうか。それは彼ら自身の力や意志の強さによるものではありません。先ほどイエス様が言われたように、それはただ神の恵みによってのみ可能となった奇跡的なことなのです。具体的には、彼らがイエスを主であると信じたことによって、このお方こそが神の国をもたらし、自分たちを救ってくれる主だと信じたことによって（ルカ5:8）、彼らは自分の物、自分の家族を捨てて、後に残して、イエスに従うことができたです。そのようにすべてをイエス様に委ね、信頼して、従っていくことができました。しかし、それはすべて神の恵みによって起こったことなのです（エフェ2:8）。

そしてイエス様はそのように神の国のために自分の家族を捨てた者はだれでも、「この世ではその何

倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける」と約束なさっています。

神の国のために家族を捨てた者は、この世でその何倍もの報いを受けるのです。この「受ける」という言葉は「返してもらう」という意味もあります。すなわち、神の国のために家族を「捨てた」としても、捨てっぱなし、失いっぱなしではないのです。返してもらえる。それゆえ妻を捨てると言っても、それは必ずしも妻と縁を切る、離婚するというようなことではありません。イエス様に従うため、神の国の働きのために一旦、家族を後に残す。そしてイエス様を第一として従っていく、神の国のための働きを第一とする、優先させるということです。そして後に残した家族はそのまま失ってしまうのではなく、返してもらえるのです。しかも何倍にもして返してもらえる、とイエス様は言うのです。ここではイエス様を中心とする神の家族、すなわち教会のことが考えられていると思われます（ルカ 8:21)。イエス様のため、神の国のために家族を捨てた者は、この世において、捨てた自分の家族だけでなく、主イエスに結ばれた神の家族が何倍にもして与えられるのです。そのようなこの世での豊かな祝福が必ず与えられるとイエス様は約束してくださっています。

さらにそれだけではなく、「後の世では永遠の命を受ける」と約束されています。ここに、あの金持ちの議員が最初に尋ねた「何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」という問いへの答えがあります。すなわち、「神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも」「後の世では永遠の命を受け継ぐ」ことができるのです。しかしそれは人間の力によってできることではありません。ただ神によってのみ、神の恵みによってのみ、できること、可能になることです。そうして神によって私たちは救われ、この世で豊かな祝福をいただき、来たるべき世では永遠の命をいただくことができるのです。すべては神の恵みによることです。この主の約束を信じ、励まされながら、私たちは共に主イエスに従い、神の国のために働いていきたいと願います。祈ります。